

# NP-PAKism

エヌピーパックイズム

2014 / 1月号

vol.17

環境や資源の保護に優れた容器「紙パック」を提供する「日本製紙株式会社 紙パック事業本部」が、リサイクルのさらなる推進を願って発行する環境情報誌です。

環になる 人を結ぶ 5

山田洋治さん

株式会社山田洋治商店 代表取締役社長

## 斬新かつ柔軟な発想をもって 循環型社会を支えていく

洗って、開いて、乾かして。紙パックリサイクルはわたしたちの日常生活の一部となりました。回収拠点に集められた使用済みの紙パックを回収し製紙工場へと運ぶ、その役割を担っているのが製紙原料問屋です。

牛乳パックのリサイクルが市民運動として始まった1984年、どこも受け入れなかった使用済みの牛乳パックを製紙原料として唯一受け入れたのが、前号の特集で紹介しました丸富製紙株式会社と、回収にあたった山田洋治商店の山田社長でした。

1967年、24歳で起業した山田社長。リサイクルを呼びかけた全国牛乳パックの再利用を考える連絡会(全国パック連)の前代表・平井初美さん、丸富製紙の佐野会長が共に故人となった今、紙パックリサイクルのシステムを創り上げた当時のお話や、「古紙を回収し製紙会社に納品するということ」にとどまらない山田洋治商店のお仕事についてなど伺います。

株式会社山田洋治商店  
代表取締役社長

# 山田洋治さん

## 斬新かつ柔軟な発想をもって 循環型社会を支えていく

夕方4時、山田洋治商店新座営業所に紙パックを回収したパッカー車が次々と戻ってきます。ヤードから、若い社員たちの大きなかけ声が響いてきます。古紙回収業ではめずらしく、ここで働く社員のほとんどが30代から40代です。

「多くの社員が動いているというのは、それだけトラックもでていてということなんです。スーパーの営業時間を外して回収に回るため、早朝5時から夕方まで二交代制で動いています」

### ひらひらの意識改革があった

1984年、全国パック連平井初美さんの呼びかけにより牛乳パックリサイクルは始まりました。そのシステム作りを平井さんと連携し進めたのが山田さんと丸富製紙の佐野廣彦会長でした。各家庭1枚、2枚という少量で出される紙パックをいかに集約していくのか、洗わず出されることによる深刻な臭いの問題をどうしていくのか、紙パックのリサイクルは人々の意識の改革を問うものだったと言います。

「まず、—という理由で何のために集めるのか—を話し合いました。洗って開いて乾かす、その手間をかけてもリサイクルに出すということを納得してもらうには、〃捨てるにリサイクルすることがなぜ良いのか〃—ということを明確にしていくなければなりません。そこで、増え続けるごみ処分場の問題、CO<sub>2</sub>排出による地球温暖化など、さまざまな環境問題に対して、使い捨てるの社会から日本が切り替わっていく必要があるのではないかと、そしてモノを大切にすることを育てていく教育をしていくこと、この二つを徹底して訴えていく運動をしようということになりました」

平井さんと山田さんは、全国の自治体を回り講演を行います。自治体の反応はよく、ボランティア活動に携わる人が集まってきました。市は回収ボックスの設置を始め、主催のイベント会場には人が溢れるほどでした。同じころ、生協も立ち上がります。



種類別に分けられた回収古紙。中央に紙パックが見える。



雨のなか、社長自ら施設を案内してくださる。



倉庫に積まれた家庭紙の製品。紙パックを原料に使用したもので、回収先の学校やスーパーなどに販売している。

マスメディアにも取りあげられ、運動は全国的な広がりになっていきました。

「全国パック連第一回全国大会が開かれたころには、回収量もひと月80トン、90トンへと増加し、私たち2社では行き届かないほどになりました。そこで次は同業者の方々に協力を訴えていきました。また、運動が一次的なもので終わらないよう、役所から町会など、下へ下へと働きかけていきました。そうこうしているうちに乳業メーカーも動きだしました」

現在では全国の約2割、関東の約6割の紙パックを回収している山田洋治商店ですが、始まりは、山田さん自身が少量の紙パックを集めて回るボランティア活動からスタートした運動でした。スーパーにも、利益のためではない活動の趣旨と協力を訴えて回りました。一店舗の店頭回収量は決して多くはありませんが、いくつかのスーパーの協力があれば効率よく回収することができます。回収の際に紙パックを使用した商品を納入し、店や従業員用のトイレで使用してもらおうよう働きかけてきました。

### 発想して行動する

どこも受け入れなかつた使用済み紙パックのリサイクルを受け入れられたのには、その10年前から、山田洋治商店と丸富製紙とで紙パックのポリエチレンを剥離する技術の研究など行い、体制が整っていたという背景があります。15歳からこの業界で仕事をしてきた山田さんは、使用する薬品も含め、製紙会社と研究開発をする立場となっていました。

「40年ほど前、ある建設会社さんから塗り壁材にまざる繊維になる紙はないかという話があり、紙コップなどを粉砕し、繊維状にして使うことを提案しました。そのなかに産業古紙の紙パックもありました。やがてクロス壁が一般的になり、余った紙パックの次の再生方法として家庭紙に使うことを丸富製紙さんに提案しました。単に古紙を集めて製紙会社に売るといいう商いではなく、常にいろいろと考案し、商



プロフィール  
山田洋治 (やまだようじ)

1943年、岐阜県生まれ。病に倒れた父親に代わり、15歳のときに東京にでて、古紙回収業に関わる。独立心を強くもち、24歳で製紙原料問屋「山田商店」を創業。当時としては大変若い実業家であった。東京にでるときに母親に言われた「まず先に、人のために尽くさない。尽くしてからお金を貯めなさい」という言葉を胸に、日本で初めて使用済み紙パックの回収にあたる。

40台中25～30台のトラックが、紙パック回収用のパッカー車。



品開発の提案をしきたのです」

例えば、粉状にした古紙をレンガに混ぜて焼く。紙が燃え穴があくことでレンガを軽くすることができる。段ボールや古新聞を使い、そこに種と肥料を混ぜて斜面にふきつける芝材の開発をする。スーパーの調理場の油とり用に、牛乳パックを綿状にした製品を作る。相手先の研究や提案に対し、100種類以上の古紙からさまざまな用途への利用を考えること、できないことを可能にしていこうためのアイデアを出すのが好きだったからこそ、牛乳パック回収の難問にも立ち向かうことができたと言います。

「私がいつも夜遅くまで考え込んでるように見えたのでしようね。平井さんには社長、楽しくやりましようよつてよく言われました。リサイクルの運動と言っても平井さんは、明るく楽しくいうことを大切にしておられました。第一回の全国大会では、牛乳パックのラミネートで作った服でファッションショーもやったりと、活気にあふれていましたね」と山田さんは当時を振り返ります。

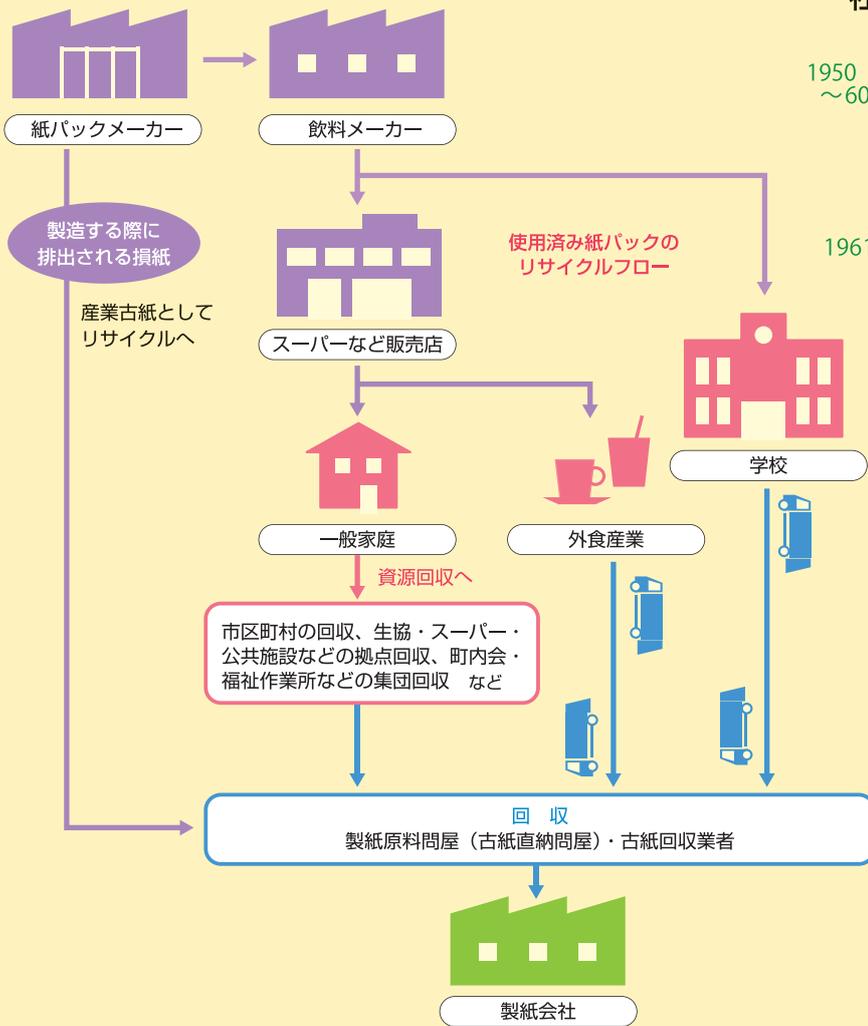
### 日本の進んだ分別への美学と願い

紙パックをリサイクルのために洗う、その習慣は失われることなく今日に至っています。日本は古紙の輸出国ですが、山田洋治商店では、紙パックだけは輸出をしません。各家庭で手間をかけリサイクルに出された紙パックは日本の社会に還元したい、またいろいろな情報が印刷されているものを安易に輸出したくないという思いがあるからです。そして、紙パックのリサイクルから育まれた精神が、他のリサイクルへと育っていったことが何よりの誇りだと言います。

「もちろん缶もビンもすでにリサイクルはされていますが、何よりうれしく思うのは、活動を通していったという事です。昔は街のいたるところで捨てられている空き缶を目にしました。それが今はないでしょうか？ リサイクルに出す人、拾うボランティア、その意識の原点のひとつに紙パックリサイクルがあつたと思います。四半世紀が過ぎ、運動に関わった世代も高齢となり、役所では紙パックの回収も入札になるなどの社会変化のなかで、回収当時の理念が失われていくことは残念でなりません。紙パックを捨てずにリサイクルすることの意味合いを忘れずに持ち続けていって欲しいと願っています」

# 紙パックのリサイクルフロー

## 社会の動きと紙パックリサイクルあゆみ



- 1950 ~60年代
  - 大型集合住宅（公団住宅）の建設が始まる  
スーパーマーケットの開業が盛んに  
水洗トイレなど生活様式の変化  
トイレトペーパーが普及する
- 1961年~
  - 日本で屋根型紙パックが使われ始める  
1964年の東京オリンピックで採用される  
スーパーマーケットの発展、学校給食への牛乳の普及  
紙パック飲料が普及する
- 1973年
  - 第一次石油危機（オイルショック）  
原油価格の高騰により、製紙原料が不足し  
古紙需要が増大する  
産業古紙の紙パックリサイクルが始まる
- 1984年
  - 山梨県の主婦グループが  
牛乳パック再利用運動を開始
- 1985年
  - 「全国牛乳パックの再利用を  
考える連絡会」発足
- 1987年
  - 第1回「全国牛乳パックの再利用を  
考える全国大会」開催（大月市）  
使用済み紙パックのリサイクルが  
全国的に広まる
- 1992年
  - 全国牛乳容器環境協議会設立



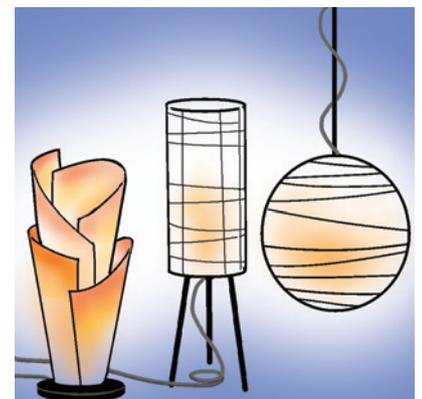
## 赤星たみこの Milk Break

日本人は紙を上手に使う民族です。なにかを書いたりするだけでなく、建造物にも紙が使われます。私の家をリフォームしたときは洋室に障子を入れました。昼間は外の光を柔らかく通してくれます。それなのにカーテンより外から見えにくい。気密性が高いので結露が無くなりました。さらに、湿気を吸ってくれるところも気に入っています。光を通すことから、行灯や提灯にも使われ、今は和紙のランプシェードもよく見かけます。

それからなんと言っても折り紙！ あまりたくさん種類は知りませんが、それでも折鶴は折れます。鶴を折ただけで海外の友人から大絶賛を受けて鼻高々でした。

紙という素材は折っても壊れないという素晴らしい性質があります。木の板やガラスなどは「折ることイコール割れる（壊れる）こと」ですが、紙は折っても畳んでも大丈夫。だからこそ、折り紙としていろんな形を作ることができるのです。

今は折り紙で恐竜や動物などの立体を作るアートも盛んです。紙が「折っても壊れない」からこそできるアートですね！



■赤星たみこ  
漫画家・エッセイスト。  
エコや家事に関する連載や著作多数。  
環境問題の講演会でも活躍中。



日本製紙株式会社 紙パック事業本部 環境情報誌 NP-PAK ism Vol.17 2014年1月発行  
編集：日本製紙株式会社 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 4-6 御茶ノ水ソラシティ  
TEL(03)6665-5555(代表) FAX(03)6665-0350  
e-mail npp-qa@nipponpapergroup.com URL <http://www.nipponpaper-pak.com>

当社のウェブサイトから環境情報誌「NP-PAKism」のバックナンバーがダウンロードできます。